

地域子育て支援拠点（子育てひろば）での出来事エッセイ（利用者さんからの声）

育休中のママも利用。そこで真の友達を作り、これから続く子育てへの力をつけエンパワメントされている様子がうかがえる【親が、親として学び成長する場】である。

出会いの場 わらべに乾杯！

鍵山その子（茨城県）
土浦市子育て交流サロンわらべ

当時私はボロボロだった。産休前は教員としてバリバリ働いていた。社会からの疎外感。おまけに息子はアトピーだった。夜中痒がって何度も起きる。一晩中抱っこで歩き回った。食物アレルギー。母子共に魚、野菜、塩のみの食生活。ジャガイモや玉ねぎにまで反応して突然のじんましん、病院に駆けこむ日々……。

それでも周囲に弱さを見せられずにいた。ママ友と呼べる人は何人かいたけれど、私にとってママ友は「子どものために一時的に仲良くする友だち」という定義だった。真の友だちとは違う、距離を置いた関係。アトピーのことを話題にすることはあっても本当の辛さや悩みを打ち明けることは無かった。

そんなとき一週間実家に帰った。久しぶりに訪れた「わらべ」でママ友たちが「おかえりなさい」と声を掛けてくれた。その言葉は思いのほか温かかった。凍りついた心が溶けていくような気がした。

その日私は素直な気持ちで子育ての悩みを打ち明けた。「なんでうちの子アトピーなの？パパも私もアトピーなんかじゃなかったのに！」そんな私の問いかけに「ひかる君にはどっちにも似ていない素晴らしい部分が他にもたくさんあるってことだよ。」と言ってくれたママ友がいた。それってすごい！目からうろこが落ちる思いだった。

思えば毎日毎日会って他愛も無い話をする中で私は随分救われていたなあと。いつのまにかママ友は私にとって大切な真の友だちになっていた。突き詰めて考えれば人と人、ママとかママじゃないとか関係ないこと。無意味な壁を作っていた自分が恥ずかしかった。

あれから5年、長男は5歳、次男は2歳、昨年10月に三人目が生まれた。ママ友たちとは今も毎日のように会っている。大切な友だちだ。「わらべ」には時々思い出したように訪れる。そこには変わらぬ温かさがある。私がママ友と出会えたように、素敵なお会いを提供し続ける「わらべ」に乾杯！

地域の中で継続的に親子に関わることができる拠点。「こども」だけでなく「保護者」をも一緒に見守ることができることで子育ての不安やイライラを解消し【虐待防止】にもつながっている。

嬉しい息子の成長

庄田尋子（石川県）
親子つどいの広場まんま

「はると君がいるから大丈夫だね。」

「まんま」で遊ぶ子どもたちの中に息子がいる。うまく遊んでくれるし、はると君がいれば安心、というママ友のことばである。2年前には考えられないことば。嬉しくて心がくすぐったい。

2年前、2歳だった息子はトラブルメーカー。おもちゃを取ったり、お友だちを訳もなく押し倒したり、息子が行く先々で泣き声上がる。「ごめんね、ごめんね」と謝り歩く毎日。新米ママの私は息子の行動が理解できず、「私の育て方のせいなのか」とひどく落ち込んだ。「またあの子がきた」と嫌がられるのではないかと思い、「まんま」に向う足も重くなった。そんな私にママ友は、「誰もそんな風に思っとらんわいね。今日もやんちゃ坊主連れてきたしよろしく～、ぐらいの気持ちできまっしね！」と笑い飛ばしてくれた。「まんま」の先生方もそんな息子や私にあたたかい目で寄り添い、受け入れて下さった。

それから2年、4歳になった息子は「まんま」の中ではすっかり面倒見の良いあんちゃんだ。下の子たちには優しく、同い年の子とは言葉で思いを伝え合いながら楽しそうに遊ぶようになった。その成長した姿がとても嬉しい。

知り合いもおらず、地理もよく分からない土地での子育てスタートはとても辛かった。家の中で赤ちゃんを抱え、ひどく追い詰められていたと思う。生後4ヶ月の息子を抱え、おそろおそろ「まんま」に行った日から4年。「まんま」のおかげで私にも息子にもたくさんの友達ができ、子育てもずいぶん楽になった。子育て真っ最中のママ友と話すと、家の中にいたら不安やイライラでくすぶりがちな気持ちが吹き飛び、心が軽くなる。

生意気盛りだが、数年後振り返ったらきっとかわいい盛りなのだろう息子の姿をつまらない心配やイライラで見逃さないために、明日もまた「まんま」に行き息子共々笑顔になって、優しいママでいられますように。

子育ての孤立感を防ぐのも地域子育て支援拠点の大きな魅力。

はじめての子育ては土間土居と不安だらけ。

「子どもを預かる」というサポートではなく「親子を見守りともに育つ」場も地域には必要。

なんくる家(や)は私の故郷(ふるさと)

黒石恵子（沖縄県）

みどり子育て支援センター「なんくる家」

私が「なんくる家」と出会ったのは、今からもう十年前。一番上の娘、只今十一才が一才九ヶ月の頃。急な転勤で福岡から沖縄へ。九十九パーセントの不安と、たった一パーセントの期待。右も左もわからない土地での初めての子育て。どんなに淋しく心細かったか……。でも立ち止まってはいただけないと思い、市役所で「なんくる家」を教えてもらったのです。ウチナー口(ぐち)が飛び交う一軒家。私と娘は居場所を見つけることができました。何ヶ月か過ぎた頃、運動会に参加しました。お遊戯とかけっこ。生まれて初めての運動会に、少し緊張気味でしたが楽しい思い出となりました。数日たったある日、先輩ママから「さ～や、運動会が終わって変わったね。ママと離れて友達と遊べるようになったさ。成長しているさ～」と。この言葉がどれだけ嬉しかったことか。沖縄に来て「一人で子育てががんばらないと」と、肩に思いっきり力をいれていた私。自分の子どもをちゃんと見ていてくれる人がいるということ。私は一人じゃないんだと肩の力が抜けていくのがわかりました。

それから二人目が生まれ、三人目を妊娠中、つわりがひどく動けない私を心配し、長男を預かってくれる友達も「なんくる家」で出会った一人です。「今から迎えに行くからね」と毎朝のメール。毎日預かるということは、本当に大変な事なのに「大丈夫よ」と笑顔で自宅まで来てくれることに心から感謝しました。もちろん今でもその方の家に遊びに行きます。まるで実家を訪ねる様に……。

お弁当を全部食べたと自慢気に見せる子供に歓声があがります。トイレトレーニングはもってこい、「えらいねー。すごいねー。」とみんなでほめまわります。自分の子供がほめられる、それだけでママは幸せを感じられるんですよね。私はここでたくさんの人に出会い、そして助けられました。だからこそ地元を離れ沖縄で子育てを続けられたんだと思います。